

論文の内容の要旨

論文題目 夏目漱石一眼は識^しる東西の字

氏名 池田美紀子

本論文の副題および序章の題「眼は識る東西の字」は、夏目漱石が1900年、英国留学に出発する前に熊本で詠んだ五言古詩の第一首から取られている。東西両洋の文化のはざまに生きた漱石自身の心情をよく表現しており「眼は識る東西の字 心に抱く古今の愁い 廿年混濁を愧ず」とつづく。漢学から洋学へ転向し東洋と西洋の言葉・文化を学んだが、心に大きな悩みを抱えるようになった。いまだ「英文学とは何か」との疑問がとけず何もものもつかめていない。このような不安と焦燥感を抱いて漱石は海を渡り、西欧文明の衝撃に直面しつつ、その後の研究と創作の土台作りに励む。

ロンドンに着いた漱石は大英帝国の繁栄と凋落の兆しを目のあたりにし、日本の開国を英断した維新の先人に感謝する。芸術上の価値判断では、西洋人の基準をうのみにせず、「自己本位」の立場を確立したとき不安の「霧」が晴れたと言う。世界的な視野のなかで自国を観ると同時に「日本人としての立脚点を失ってはならない」とする彼の信念は、帰国後の作品に投影される。『三四郎』は「文明批評家」広田先生の立場に自分の将来像を見、その思想と姿勢は『それから』の代助、「高等遊民」像へと発展してゆく。圧倒的な西洋文明の影響下に漱石はさらされたが、近代日本の運命を同時代人として共に生きたことが、帰国後の彼の創作を生み出す原動力になった。その体験と思想が漱石作品に広がり深さをあたえ、わずか11年間に多くのすぐれた作品群を生み出した。漱石の豊かな世界は、

それ自身比較文明的的位置にあり、広く「世界文学の視座」のなかで論じ直す時期が来ている。本論文は作品のテキストに密着しつつ、夏目漱石の創造の軌跡に未知の角度から光をあて、新たな漱石像構築のための問題提起を試みる。

留学、外国体験が無かったら、作家漱石は生まれなかった。その点からも漱石文学を研究するためには漱石の置かれた同時代の西欧文明の中にそれらをあらためて置き直して見る必要がある。本論文の主要テーマの一つ「絵画と文学」を軸に第一章では、漱石作品が描き出したヒロインの肖像と英国 19 世紀末芸術思潮との関係を考察する。美術好きの漱石がラファエル前派、アール・ヌーヴォー、象徴主義の美的環境に身を浸し魅惑されその滋養を吸収したことが、その後発表する『幻影の盾』、『薤露行』、『虞美人草』、『三四郎』などに反映されていることを、〈詩〉と〈絵画〉の両面から作品を読み解き明らかにする。スウィンバーン、D・G・ロセッティ、バーン＝ジョーンズ、ギュスターブ・モロー、ユイスマンス、フロベール、シェレー、ペーターなどの〈詩画〉に描かれたいわゆる「宿命の女」像は、漱石と同年の日本作家が創造し得なかった新しい女性像を描き出させるきっかけとなった。

〈絵画と詩〉この両域の交錯は漱石の生涯にわたる持続的な関心事でもあった。少年の頃から南画の世界に心の安らぎを見出した漱石は、自らも〈山水画〉を描き〈漢詩〉を詠んだ。盛唐の詩画人王維がのこした『輞川集』の庭園、山荘、廢墟のある風景は詩に詠まれ、画に描かれ人びとの憧れとなり東西両文化に伝播した。蕪村、大雅などを魅了しその波動は、『十便十宜図』の競作にもあらわれた。この頃 18 世紀のイギリスでは、風景画をもとに庭園造りが盛んになり、ピクチャレスクツアーが流行した。

漱石は留学中クロード・ロランの絵画を見て共感し「佳し」と感想を記したが、先見性に富んだ論文『英国詩人の天地山川に対する観念』および、十八世紀文化史とも呼ぶべき講義『文学評論』でこの問題を考察していた。従来の漱石研究においては、ほとんど見過ごされてきたこの二作品を本論文はとりあげた。古典主義の詩人と言われるポーブは、じつは、「人工式庭園」をきらい、自然を愛し、「風景式庭園」を賞揚した詩人であった。詩画一致のピクチャレスクは、ロマン主義へのプレリュードであったことを漱石は『文学評論』のなかで指摘している。

詩人と画家はお互いを補足し合う。クロード・ロランの絵は、ヴァージュールの詩を絵画にしたものだったが、トムソンはクロード・ロランの絵画を見ながら詩『四季』をつくった。人々は「天然」に目覚め、旅をし、芸術は〈理性〉から〈想像力〉へ訴えるものへと移行してゆく。近代ヨーロッパ精神史、文化史の中で東西の〈風景詩〉と〈絵〉が漱石を中心点として結びついた。

漱石は英国から帰国後の心労が重なった時期 11 篇の「英詩」を書いた。そこには漱石の「低音部」とよばれる小品にも共通する「心」の内面が告白されている。ロマン主義から象徴主義への橋渡しをした詩人への深い関心も見られ、これまで「官能主義的高まりをみせている」などの一語で評されてきた「英詩」は、漱石留学の同時代的雰囲気から読み

解くことも必要だ。『薙露行』は、マロリー、テニソンを典拠としながら漱石独自の作品に作り上げた。彼の眼目が、ランスロットとギネヴィアの不倫の恋にあるとする説に対し、本論文はランスロットとエレーヌの〈未了の恋〉とその〈埋葬〉にあったと考える。漱石独自の紅色の〈エンブレム〉の移動に込められた作者の真の意図は何か。作家が文体を模索した過程を知る上でも本作品は重要である。

明治以来の日本文学者のなかで、はじめてE・A・ポーという鋭い人間性の観察者である作家に注目したのが夏目漱石だった。そのことを私は「漱石とポー」（『比較文学研究』1978）で初めて指摘した。彼は若い日に書いたエッセイ『人生』（明治29年）でポーの根本思想に深い共感を示し「われは人間に自知の明なき事を断言せんとす。之を「ポー」に聞く」と述べている。「性格など纏まったものはない」（『坑夫』）と言い近代合理主義への不信、「剣呑なる人生」にかいまみえる実存的深淵の表現は、とくに漱石の後期三部作、『彼岸過迄』、『行人』、『こゝろ』に貫かれている。

漱石は『こゝろ』の連載にあたって『心』というまとまった題をつけその中に違った名の短編を幾つか含むという構想をしめた。それを彼に思いつかせたのは、以前に漱石が『ポーの想像』を書く際に参考にしたと思われるウッドベリー・ステッドマン編『ポオ全集』だったかもしれない。その背表紙を見ると、五つの短編をおさめて「良心の物語」（Tales of Conscience）と記されている。この「良心の物語」という題の根拠は、ポオが『ウィリアム・ウィルソン』の題字の横にそえたエピグラフ「そも何ぞ、わが行く手を阻む恐しの影、良心とは何ぞ」である。

ポオの『ウィリアム・ウィルソン』とは、罪を犯し、〈良心の影〉におびやかされる男の、心の葛藤の物語だ。そして、漱石の『こゝろ』もまた、先生の行く手を阻んだ「恐しの影」に脅かされる「良心の物語」ではないだろうか。漱石が、みずからの存在の内的要求の中で出会ったE・A・ポーへの深い関心がこの作品の底流にある。

卓越した文明批評家、思想家として漱石が果たした役割は大きい。漱石作品のまわりには漱石が生きた時代がある。彼は日本が日露戦争に辛うじて勝った時は安堵した。すべて西洋を手本にしなればならなかった風潮から、以後、文化的にも西欧と肩を並べることが出来ると喜んだ。だがほどなく日露戦後の日本の行く末に漠然とした不安を抱き始める。〈個人〉と〈国家〉の関係は〈寒暖計〉のようなもの、平和な時には国家々と云わなくてもよいが、国家が存亡の危機に瀕した時は皆一丸となって国家の為に働くだらうと言う。彼は死の半年前（1916年元旦）に書いた「軍国主義の未来」で、ドイツに台頭しつつある「軍国主義」ファシズムが、自由を重んじるフランス、イギリスを席捲することを憂慮した。中編『趣味の遺伝』は、将軍の凱旋に出くわした太平の逸民「余」の「涙」が、誰の為に流されたのかをテキストの丹念な読みを通してあきらかにする。将軍のために「余」は涙を流したとする説が多いが、本論文の読みは異なる。

漱石の『こゝろ』が、明治天皇に殉死した乃木希典の行為に感動して書かれたという説が多いが果たしてそうだろうか。森鷗外が乃木殉死をめぐって発表した『興津彌五右衛門

の遺書』の「初稿」、「改稿」の書き変えと合わせ読むことによって、漱石の「明治の精神」の真の意味を探る。維新の前年に生まれた漱石は、自己を新旧両世代を知る「海陸両棲動物」と呼んだ。価値の大転換期に青少年期を過ごし、近代国家建設の使命感を持って生きた明治人であると自身を考えていた。

漱石の作家としての営みはわずか10年余だが、その間に社会、時代、世界思潮の動きは急速に変化してゆく。内外の動きに敏感だった漱石の作品は、おのずとその変化を反映させずにはいない。「前期三部作」と呼ばれる『三四郎』、『それから』、『門』は、後期三部作『彼岸過ぎまで』、『行人』、『こゝろ』と＜構造的＞に異なっている。「前期」は、＜神の全知＞の視点から描かれ、作者は登場人物の＜行動＞、＜性格＞をすべて把握し、制御していた。しかし「後期」は、ナレーターの「語り」＋主人公の「告白」の二重構造を採る。＜構造＞の変化は単なる小説の「形式」に終わらない。作者の人間の捉え方、世界像の転換までも意味している。

『彼岸過迄』の都市の迷路は、大都会に住む人間の「心の迷路」と重なる。19世紀後半、都市の膨張とともに、大都会にあふれる群衆とそのなかにまぎれこむ＜心の秘密＞を持った人間、それに惹かれて夜の迷宮都市を追う探偵めいた男。『彼岸過迄』の「須永の話」は都市に暮らす高等遊民須永の内へ内へと巻き込む「心」を描くすぐれた中編。漱石が愛読したドストエフスキーの主人公『地下室の手記』のように $2 \times 2 = 4$ の＜合理＞で割り切れない近代人の不可解な心理を抉り出す。18世紀に始まる理性信仰の啓蒙時代は終わり、脱線、迂回、曲線のスターンの的モダニティー小説の面も持つ。

ハーンが西欧十九世紀末文学、ロマン派詩人たちなどを講義し紹介した功績は大きい。『クラリモンド』、『永遠の女性』などその波紋は、漱石の『夢十夜 第一夜』にも及ぶ。未完の最終作『明暗』を『行人』につづき味読する。18世紀に始まった典型的「小説」ジャンルが壊れ、アンティヒーロー津田をめぐる「ポリフォニー世界」の展開の中に新しい小説の方法を探る漱石の最後の試みがある。

私はこれまで外国で日本文学・文化を教えた経験からも、漱石文学の時代を超えた「新しさ」を感じて来た。文学作品が、時間や場所を超えて普遍性をかちとるためには、作家が自らの時代と自国の運命を引き受けて生きることが必要だといわれる。漱石はたしかに短い五十年の生涯をそのように生きた。